

乳用雄子牛肥育経営の発展方向

内 田 昭 修

(福岡県立農業試験場)

UCHIDA, A.

Studies on the Fattening-farms of the Dairy Calves.

1. 調査の目的と方法

福岡県で乳用雄子牛の肥育を試みる農家が現われたのは昭和41年頃からであるが、その後これが県内各所に普及し、昭和49年2月現在で飼養戸数約600戸、頭数約15,000頭に達した。ところがこの経営は多くの問題点をかかえているようであるので、昭和49年度から3ヵ年計画で調査研究に着手し、49年度は県内の主な肥育地区である甘木市、八女市、筑紫、粕屋中部、筑穂町内野、浮羽町および三潁町の7農協地区の実態調査を行って、県内における肥育経営の現状と問題点を明らかにした。なお、この研究は佐賀県を除く九州7県の共同で実施している「九州地域における肉用牛経営の確立に関する研究」の一環として実施中のものである。

2. 調査結果の概要

1) 代表地区における乳用雄子牛の粗生産額はその地区の農業粗生産額の20~30%を占めていて、すでに一つの重要な作物として位置づけられている。

2) 乳用雄子牛の飼養規模については、甘木市、筑紫野市などにはそれぞれ50頭以上の農家が10戸程度点在しているが、浮羽町や三潁町では20頭未満の小規模農家が多い。大規模農家は殆んど山間や山ろくに立地していて、地区によって肥育牛経営の位置づけはさまじみであるが、経営方式としては「稲作プラス肥育牛」が福岡県における基本型となっている。

3) 乳用雄子牛の肥育は県の諸施策により、あるいは農協の指導により展開されていて、調査地区全部が農協指導型に該当する。どの地区でも農協の予託により素牛を導入し、飼料費は農協の貸越制を採用しているが、ともすると農協の指導性が強すぎて、農家は経営の自主性

を喪失するきらいが感じられる。

4) 素牛の確保については、県内の搾乳牛頭数をもとにして試算した結果によると、搾乳牛1頭当たり26ヵ月に1頭の雄子牛が生産されるとみた場合、昭和48年度では約52%の県内自給が可能となる計算結果が出たが、代表地区では肥育経営が盛んなこともあって、多いところでは80%以上、少いところでも35%以上の素牛が北海道から導入され、各地区の地区内での自給率は20%以内のところが多い。

5) 飼料作物を乳用雄子牛肥育のために栽培する農家は稀で、購入濃厚飼料と稲わらが飼料の中心となっている。飼養規模の大きい農家では、稲わらの確保が困難で、バカスキューブなどの購入粗飼料にたよる農家も多い。

6) ふん尿処理では、一時、焼却施設を備えた農家もあったが、性能が好ましくなかったため利用を中止し、土地還元而努力している。ふんと稲わらを交換する方法で、需要農家へふんを搬出することと、稲わらを確保することが、多頭飼養農家の課題となっている。

7) しかし、肥育牛農家のこうした努力が、地力消耗的作物に片寄り勝ちな各地区の農業生産に、補完的な役割を果し、農業生産力を維持発展させていることは見逃せない。

3. 発展方向

福岡県農業は水田農業を基盤として発展してきたが肥育牛経営も「水稻プラス肥育牛」という方式で発展するであろうと思われる。ただし環境問題などの制約から、山ろくまたは山間地帯では50頭以上の規模を採用することが可能であっても、平坦水田地帯では20~30頭の範囲が好ましいと思われる。